

本論文は、明治中期から昭和戦前期にかけて、対中国関係を専門とし、軍人でありながら日中間の政治外交関係にも重要な影響を与えた軍人たち、いわゆる「支那通」について、実際に中国に渡って任務を遂行した軍人たちそのものに焦点を当て、その多様な任務の内容と意義を、彼らに与えられたその時々々の訓令などの基本史料に即して明らかにした研究である。いわゆる「支那通」について、これまでの研究史においては、陸軍中央（陸軍省と参謀本部）に勤務するいわゆる「支那通」の対中国認識が、日本の対中政策にいかにか大きな影響を与えたかという観点、あるいは外務省の行う対中外交をいかに阻害したかとの政軍関係論の観点から考察が加えられてきた。

本論文はこのような研究成果をふまえながらも、これまでの分析視角とは異なり、中国政府や地方政権の軍事機構・学校などにおいて軍事顧問・教官としての任務を果たし、あるいは、公使館附武官や要地の駐在武官として情報収集を行い、あるいは、特務機関員として諜報活動に従事した軍人たちを、長い日中関係のスパンの中に置いて、一貫して叙述した点で研究史上の意味をもつ。このことは、従来の研究が、日中関係が比較的良好な時期であった、日清戦後から日露戦争期の軍事顧問・教官の分析で論を終えていた欠点を補うものであり、①辛亥革命期以降、南北対立期の中国における、情報将校としての革命への干渉、②中国が第一次世界大戦に参戦して以降、日中共同防敵協定下の協力関係を軸とした活動、③満州事変勃発以降、特務機関を中心とした経済政策立案への干渉、④日中戦争下、汪兆銘政権内での謀略活動など、必ずしも性格を一つにしない多様な活動を実証的に明らかにした点など高く評価されるべきである。さらに、中国政府からの要請を受けて日本軍人を中国側に送り出した招聘制度について、運用の実態、制度の変遷について初めて系統的に明らかにされた点も注目される。

日本人の軍事顧問・教官を精緻に分析しようとするあまり、中国政府や地方政権が時に応じて招聘していたはずの少なからぬ外国人軍事顧問・教官全体の中における日本人の位置づけがなお不十分である点、また、史料に即して分析しようとするあまり、政治上その意味を時期に応じて変容させていったと考えられることば、たとえば「特務」などの用語につき、変化の捉え方がなお不十分である点など、残された課題はあるものの、それは本論文が研究史上に持つ価値を減ずるものではないと考える。よって、本委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。